

仙台司教区 教区事務所だより



(第 61 号)
昭和57年11月1日

主のみ言葉の徹底した実践者

聖コルベ神父の信仰にならおう

日本ゆかりのマキシミアン・コルベ神父の列聖式が、この10月10日バチカン大広場で盛大に行われた。アウシュビッツの強制収容所で、他人の身代りに餓死刑で死んでから、わずか四十年である。コルベ神父は昭和5年にゼノ修道士らと来日、長崎に聖母の騎士修道院をつくって六年間宣教のため働いた。

コルベ神父のことを報じたバチカン機関紙「ロッセルバトレ・ロマノ」は、「困難な今世紀の保護者」という見出しをつけていた。コルベ神父の四十七年の生涯が、とりわけ彼の愛が、いまもつとも私たちに欠けているものを示し、その運命が問われている現代社会を救う道だという意味にほかならない。

* * *
コルベ神父の死は文字どおり、「友のため命を捨てるより大きな愛はない」という、キリストのみ言葉の実践であった。つねに福音書に接する私たちに、キリストのみ言葉

の意味が分らないということはない。しかしそれをどれほど実践しているかと反省するなら、誰でも自分の不徹底さを嘆かずにはいられないだろう。分つていてもできないというなまぬるさだが、この壁を破らないかぎり私たちはほんとうのキリスト者にはなれない。

* * *
コルベ神父は私たちに、徹底した隣人愛の実践を示された。しかもそのことは、日常の深い信仰生活から生まれるものであることも教えてくれた。私たちは信仰生活で、世間的なことがらや、自分の勝手気ままな利己心に妥協してはいないだろうか。それほど悪くもない信仰生活と比べても、なんのよるこびもない、心をふるいたたせることもない信仰になつていないだろうか。自分の判断だけでやさしい信仰生活をえらぶのはやめよう。そこにはほんとうの信仰のよろこびはない。

* * *
コルベ神父があるいた生涯は、まさにキリストの十字架の道であり、貧しさや病苦として屈辱の死であった。しかしコルベ神父は全生涯を、そして最後の死も信仰によるよろこびで受けられた。いま私たちに求められていることは、信仰生活をもう一歩すすめた、勇氣ある実践である。そのことだけが私たちに信仰のよろこびを与えてくれ、家庭や社会に正しい秩序をもたらし、平和にみたますのである。利己心と物質主義に行きづまった現代を救う唯一の道でもある。

* * *
祭壇にあげられた聖コルベ神父にならい、徹底した信仰生活の実践を決心しよう。また聖コルベ神父の取り次ぎによつて、私たちの安易な心に勇氣と、愛を与えて下さるよう神のお恵みを祈ろう。

司教日程 (10月13日現在)

- 11月8日 司教評議会(仙台)
- 9日 仙台CK役員会(仙台)
- 15~20日 教区司祭団懇想会 (トラビスト修道院・当別)
- 11月24日 宮宗連報編集委(仙台)
- 11月29日~12月4日 司教会議(東京)
- 12月6日 教区司祭団月例会(仙台)



82年間目標

家庭から社会に
キリストの平和を
(仙台教区)

教区司牧評議会開かれる

信徒研修機関の設置を答申

9月23日、教区司牧評議会の秋の総会が仙台元寺小路教会で開催された。今回審議された議題は二つ、いずれも前回からの継続審議であった。

①「年間司牧目標の実践の手引き」作成の件は、作成委員会から提出された原案を検討して承認した。なおこの手引きは、「理解の手引き」を加えて、早速各小教区、修道院等に配布された。

②「教区に信徒を主な対象とする研修機関

第13回福島カトリック者の集い

白河で、二百人が参加

「家庭から社会にキリストの平和を」をテーマに福島県カトリック者の集いが9月19日白河市中央公民館において開催された。

県内各地の信者約二百人が参加し、佐藤千敬司教の主式による6人の司祭の共同司式でまずミサが行われた。このミサ中の献金は、矢吹教会の聖堂建築資金として贈られた。

続いて石川晃氏（盛岡志家教会信徒会長）が「キリストの平和」と題し特別講演、「平和に対して信徒の採るべき道は、公会議の諸教会と教皇様の平和アピールに示されている。反核、反戦のみでなく、真の平和とは社会の平和、家庭の平和に根ざすものである。その



設置の件」は、昨年から継続審議してきたもの。今回も提案者（役員会）の説明、質問などがくりかえされたが、提案の趣旨は全員が承認したので、教区長に答申、その設置を働きかけてゆくことにした。趣旨は、信徒が福音宣教の担い手として期待されている今日、一人ひとりの信徒がより成熟した信徒になるよう行う研修で、教区が主催し永続的に、各階層にひろげてゆくことを考えている。

ために、まず祈り、聖母の御保護のもとに、一人ひとりが力強く行動しよう。」と結んだ。午後は各年代層に分かれて話し合いが持たれ全体会でその報告がなされた。

最後に佐藤千敬司教が感想を述べ「福島カトリックのつどいは、よく準備され、その熱意がよくうかがわれる。ミサの献金は矢吹町に送られたが、本当に困っている教会を助けることは、キリストの願いでもあり、矢吹町の教会の人達と共に感謝したい。教会内だけでなくより苦しんでいる人達、アフリカ等にもできるだけのことをしたい。」と語った。

今年の担当は白河教会で、小さな教会ながら昼食は信徒経営のレストランで手作りの弁当を手配するなどきめ細い準備のもとにこの大会を成功に導いた。

佐藤司教、カトリック医師の使命訴う

カトリック医師会仙台支部総会

去る8月29日、日本カトリック医師会仙台支部（青森、岩手、宮城、福島、四県を含む）総会が仙台のバレス平安で開催された。開会に先き立ち元寺小路教会で佐藤千敬司教がミサを捧げ、カトリック医師が一致と協力をもって結ばれ、病める人達の心と身体の痛みを深い理解者となり、医療を通して神の愛の伝達者であるようにと説教で励ました。

総会はずまず日本カトリック医師会理事の任期満了に伴う改選の報告があり、戸田宏（岩手県）早坂養吉（宮城県）竹内正也（福島県）の三氏が再選、支部長には現支部長の早坂養吉氏が再選、事務局長に星安治郎氏が再選された旨報告された。

講演会は国立病院長菊地金男氏による「末期ガンの対策」、シャルトル聖パウロ修道女会シスター今田、シスター栗又による「末期ガン患者の看護体験」の話があった。菊地氏は長い臨床体験とカトリック医師としての愛に基づく医療に対する熱意をもって話され、出席者を感動させた。また二人のシスターはさる7月12日に亡くなった今田健美神父の臨終に立ち会い、同神父の心の動きについて語り、同じカトリック者として死を迎える心の準備について考えさせるものがあった。

人首(ひとかぶ)教会

創立百年祝い 八岩手V

10月3日、岩手県江刺市人首町において人首教会創立百年祭が行われた。式典は仙台教区長佐藤千敬司教の司式の記念ミサで始まり、県内各地の教会代表者をはじめ、人首教会信徒ら約六十人が神の恵みを感じた。ミサに続いて行われた祝賀会では、終戦間近に横浜から疎開、そのまま約四十年間伝道士として人首教会を守って来た渡辺一雄氏夫妻に佐藤司教から感謝状と記念品が贈られた。

人首町は岩手県の北上山系の静かな山里で、人口千九百人の小さな町。明治6年禁教令が解かれ、岩手県内でもバリ外国宣教会による宣教活動が開始、明治10年ごろには人首、水沢地方で二十四人の受洗者があったといわれる。人首にカトリック教会が建てられたのは明治17年から19年といわれ、岩手県で二番目に出来た教会である。明治の中頃までは受洗者が

第四回夜間ハイク

”話そうよ”



元寺・塩釜間で21人参加

元寺小路青年会主催による恒例の夜間ハイクが、9月22日の夜から23日の朝にかけて行われた。今回は元寺小路教会から東仙台教会、県民の森、利府をへて、ゴールは塩釜教会というコース。ひとりでも多くの友を得て、友情の輪を広げるために、”話そうよ”という

多かつたが、その後ハリスト教会が人首で宣教を始めた頃から信者数も少なくなり、長らく定住司祭を持たず伝道士に守られながら水沢教会の巡回教会として現在に至っている。

創始者ハヤット神父迎え

仙台でもYBU30周年を記念

9月25、26の両日、仙台市民会館において講演会と展示会、そして元寺小路教会における記念ミサなど、YBU三十周年を記念して仙台でも一連の行事が行われた。

仙台市民会館では文化教室の生徒達による池の坊、草月流の華道、宮城野書人会の書道の展示、また裏千家と煎茶道織田流の点前などが行われた。講演会は9月25日午後3時から曾野綾子さんが、「現代に生きる聖書」と題し、福音を実践したコルベ神父とゼノ修道士の生きざまについて語り、聴衆を魅了した。日頃キリスト教に接する機会のない市民も多

のがその主旨である。

参加者は63歳を先頭に仙塩地区の青年ら21人。始めのうちは、「私は若い」と歩きに歩き、話しもはずむ。県民の森で休憩、利府駅に着いた頃から疲労はかくすことができず、本当に塩釜教会に着くのかと不安にかられながらも歩き続ける。目的地が間近になった頃、空は白みはじめ、全員が壮快な気分です。しばらくやすんでから、無事にあるき通したことを感謝してミサにあずかった。

数出席し興味深く話に聞き入っていた。

26日は三島大学学長佐藤直助氏の講演で、「茶、花、書のころろ」。日本文化の源流をたどりながら、茶、花、書のころろとキリスト教の精神との共通点をあげ、その接点を探ることを強調された。感謝のミサは元寺小路教会で佐藤千敬司教を主式者に三浦平三神父、ジョリコール神父で行われ、説教は京都から来た仙台においての心のもしび運動は、ケベック会ジョリコール神父によって行われ、昭和44年仙台・霊屋下にYBU文化センター開設。45年心のもしび機関紙東北版発行。47年文化センターを元寺小路教会敷地内に移転。55年YBU文化センターを上杉に新築。活発に活動している。

福島・浜通り地区司祭消息



小名浜教会兼勿来教会主任のモレン神父は休暇のため8月から来春3月までカナダへ帰国された。その間スペインのマドリッドで、ドミニコ会の開発途上国布教研究会にも出席の予定。留守中は、湯本教会のラロース神父(78歳)が湯本、小名浜、勿来の三教会を司牧することになった。また原町教会のエベール神父は病氣療養のためカナダに帰っていたが、快方にむかっただため、9月末に原町教会に帰任、信者をほつとさせた。浜通り地区の各教会では、司祭不在の場合の教会の在り方について現在研究中である。

久慈教会訪問記

—久慈は遠くなかった—

花巻教会 似内 総

ことの起こりは、昨年の待降節の黙想会。ご指導の久慈教会のトマ神父様から再度のお誘いを受け、今年の夏は、ぜひ久慈教会を訪問しようという話になり、両教会で打ち合わせの結果、その日を8月22日と決定した。しかし私達花巻の者にとつては、久慈教会は遠い。同じ県内であっても、その思いと地図の上だけでもすでに遠い気がしているのである。

朝6時半、ゲーヴィレル神父様をはじめ、全員18人が板垣勤神学生運転のマイクローバスに乗り、花巻を出発した。長い道のりを、まず入院中の信者の家族のため、アフリカの難民のため、ロザリオの祈りをする。途中転出した信者の家族を訪問するなどしながら、車は久慈へ近づいて行く。潮(しお)の香に迎えられ、久慈教会へ到着。教会の皆さんに歓迎され、野外ミサのため海岸へ向かう。

トマ神父様、ゲーヴィレル神父様の共同ミサが始まる。岩場に腰かけ、海の風に吹かれながらミサに与るのは初めての経験である。

ミサの後、久慈教会の皆さんが朝から心をこめて準備した昼食を囲み、話に花が咲く。来年の夏はぜひ花巻にと心からの招待を繰り返しながら、心をひとつにした喜びと感謝の思いをかみしめて帰路についた。

久慈は私達にとつて、もう遠くはなかった。

来年は必ず久慈の方々花巻に来て下さるだろうと期待しながら、改めて教会交流の意味を考えている昨今である。

「小さな生命をまもる会」と改名しました

八木山教会 新村 碩子

「教区事務所だより」からの依頼を受け、「実子特例法を考える会」を紹介したのは、三年前のことです。膨大な数の人工中絶(へい児殺し)が行われている状況のもとで、どのようにすれば「小さな生命が救われるのだろうか」という思いで会は発足したのでした。

はじめは地元宮城県で起こった赤ちゃん幹旋事件をまず取り上げ、実子特例法(正式には特別養子法と呼ぶ)について考え研究して参りました。三年目の今年になり、この事件を考えるだけではなく、本来の目的にいつそう近づくため、「性教育」「養子幹旋」の研究の部分を加えました。そして会の内容をよりふさわしく表現する名称を、と考え、「小さな生命をまもる会」と改めました。詳細は別の機会に譲りますが、皆さまのご協力を続けてお願い致します。

週間聖書

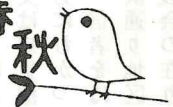
(日) 21日
(日) 28日
11月

聖書を知ること

キリストを知ること



春秋



今年も、何人かの死を見送った。みんな心に残る人たちばかりである。

〇さん。82歳。ご聖体を持っていくと、身仕度を整え正座して待っていて下さる。聖体拝領が済んでお茶を一口いただく。そんな時、よく〇さんの口を衝いて出たことば「何もわからない者ですから、どうぞよろしく」。

〇さんはこの夏、逝ってしまった。追悼ミサの朝、娘さんが一冊のメモ帳を見せてくれた。「母が、受洗した時に記したものを見つけました」と。61歳の時に洗礼を受け、その時の心境が次のように記されてあった。「全く自信もなく...自分ながら夢のような心地。余りにも信仰浅い自分を見つめる時、とり返しのつかないことになったのではと不安な気持ちになる。吾子の切なる祈りにより、意を決す。家族の中でたつたひとり他宗教。何かとつまづくことも多いと思う。でも信じよう、捧げようと祈ることを決心」。神さまの前であつて、受洗以来ずっとへりくだりの心を持つていた〇さん。ちようどマリア様のように...。11月、死を思うということは即ち、死者がその生命を賭して語りかけたそれに応える時ではなからうか?! (狼河原)

読者のページ

アフリカ難民
救済活動を通じて考える

佐井 満雄(元寺小路教会)

昨年11月、第一回街頭募金をはじめ、トレナー販売、そしてこの6月一杯をかけて行われたアフリカ難民勉強会(三回)、三留理男難民写真展(ジャスコ仙台店)、第二回街頭募金、そして三留理男講演会(仙台市立戦災復興記念館)の諸活動を通じて考えることは、我々の難民救済における本質的な関わりはいかにあるべきか、ということと教会における青年の活動のあり方である。

6月に行われた一連の活動は仙塩地区の各教会の青年に理解を得て共に考え、行動することができ横のつながりが持てたし、地域社会への宣教ということについても難民救済という行動で、ある程度は実現できたと思う。

しかしこれらの活動をした結果、次のような問題点をあげることができる。第一に小教区のそれぞれの青年の諸活動への支障、第二にこうした活動に対する青年の関心の希薄である。

第一に関しては、我々青年は、各小教区内の活動(教会学校等の小中高校生の指導、聖書研究等)の課題があると同時に、外に多する福音宣教ということも考えなければならず、この内と外との対立と調和の問題が表面化し、その実現の難しさを意識させられたことであ

る。第二に教会活動に対する青年の意欲が、あまり感じられないことである。もう少し、教会の、あるいは自らの信仰による行動に意欲的であればと思う。この一連の活動にも青年の教会離れということが露呈されたような気がしてならない。三留理氏の講演会の入場者数は、会場の席の半分(百五十人)にも満たなかった。三留理氏曰く、「この会場が一杯になつていたら世の中変わっているよ」。私はこの一言に強いショックを受けた。

今の教会は、そんなに魅力のない場なのであるうか。私達は信仰によつてこの世に平和をもたらさねばならないのではないか。本当に数多くの問題を私達青年に投げかけてくれた活動であつたような気がする。

宮城県信徒大会に参加して
鈴木 恵子(白石教会)

はじめに驚いたのは、広い会場にたくさん信者の方々が出席していたことです。ふだん私達の教会のように少数の信者という光景を見慣れている私にとって、これは新しい経験であり、また大きな喜びでした。

●第14回新世界黙想会

テーマ「聖書で祈る」

指導 沢田和夫神父(東京教区)

日時 11月22日(月)夜12時(火)午後

場所 聖ドミニコ会宮城町生活寮

会費 一般四千元、学生三千元

募集人員 15人

主催 思想庵(980仙台市連坊小路2-1)

12-16 渡辺清 tel(91)3579

●仙台・教会学校リーダー研修会

日時 11月6日(日)出陣4時半~7日(日)

場所 元寺小路教会第二集会所

講話 6日「教会学校の使命」他

P・ラポア神父

7日「教材研究発表」

各教会学校リーダーによる。

・7日はBm2時からミサがあります。

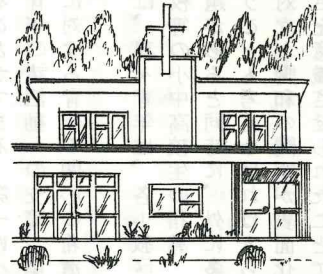
詳細は教会学校リーダーまで。

お知らせ

おらが教区

(25)

東仙台教会



私達の東仙台教会は、一九三七年（昭和12年）に仙台市で第四番目の教会として発足しました。当時バリ外国宣教会から仙台教区の布教を引き継いだカナダ管区のドミニコ会のレミユ司教が、教会の現在地を中心に広大な土地を購入。光ヶ丘と名づけ、将来の布教活動の布石とされました。そのため、この光ヶ丘地区には司教館をはじめ、スベルマン病院、善き牧者修道院、オタワ愛徳修道院、聖ヨゼフ修道院、ラ・サール修道院等が次々と建てられ、カトリック墓地も作られました。その中心に東仙台教会があります。まさに仙台のカトリックの霊的メッカの観を呈しています。

制買上げを受け、教会活動の場がなくなりました。

一九四五年終戦となり、軍から強制買上げを受けた修道院と小神学校が教区に返還されるに及んで、東仙台教会も復活し、進駐軍から払い下げを受けたカマボコ兵舎を改造し、独立した教会堂を持つことができたのです。その後仙台一といわれる鶴ヶ丘団地が近くにできて信者も増え、教会も手狭になり、新聖堂建築計画が立てられました。当時の資金計画は一千百万円で、各信徒家庭が平均七、八万円を拠出、教区から二百二十万円の補助を受け、他は他教会や個人の寄付によって現在の教会が建てられたのです。

「教会の建物は、宣教師や教区が建ててくれるものというこれまでの常識を破り、自分達の手で、という自覚で信徒が心を一つにして力を合わせて資金調達しようとする気運の高まりが教会建築計画の実現の原動力になった」と当時の主任の佐々木博神父は語っています。このようにして東仙台教会は一九七三年に落成、小林有方司教によって盛大な献堂式が行われました。

佐々木神父の後任として着任した平田浩神父は、毎日曜日のミサを生命をかける真剣さで捧げられ、我々信徒は、はかり知れない神様の生命に生かされていることを感じます。

教会活動も盛んで、ボーイスカウト、カプスカウトの各団が結成され、日曜学校も開校、子ども信仰教育、人間形成が信徒の指導によって行われています。また特色ある家庭集

会も各ブロック単位で行われ、当番の家に地区の信者が集まり、主任神父の指導のもとに聖書を読み、祈りの集会をしています。

年中行事として11月頃に大バザーを行い、各信徒が種々の物資を持ち寄り、地域の方々と交流をはかり、周辺の人達と喜びを分かちあっています。最近の大きな喜びは、当教会所属の信者が勤務のかたわら三年間もかかり、岩手県の中から切り出した大木に等身大の聖母像を彫り、ようやく完成、聖母被昇天の祝日に佐藤司教のミサで祝別され納められました。十月には特にロザリオの祈りを通して聖母に祈り、豊かな恵みに満たされるよう、信徒一同努めています。

このように私達は歴代の主任神父様方の霊的指導により恵まれた環境の中で、光ヶ丘という名は今使っていませんが、いつもキリストの光に導かれ、その光に浴し、現代社会の事象の中に生きた信仰を根づかせようと努力しています。（信徒会長・和野 邦義）

- ～ ◎各教会・各地区のニュース
- ◎提言、意見（教育、政治、経済、日常生活で感じていること）
- ◎子供の作品（作文、詩、マンガ等）
- ～ 締切・毎月5日（原稿用紙2枚以内）

仙台司教区事務所だより第61号
 昭和57年11月1日発行
 発行所 仙台司教区事務所
 〒980 仙台市本町一丁目2番12号
 TEL 0222 22 7371